

サッカーの話をしよう

ワールドカップ 予選をめぐる 64の話

FIFA World Cup™ Asian Qualifiers

アジア 沸騰!

東京新聞の人気コラム
「サッカーの話をしよう」が
巻頭書き下ろしを含む
大幅加筆で待望の書籍化。

日本代表の

「世界ベスト4」に

必要なことが、

ここにある――。

大住良之
著



あすろ出版

はじめに

序章

ワールドカップ予選という日常

目次●

第1章

トルシエと2002年の記憶

故障から選手を守れ ————— 33

監督をバックアップする力 ————— 36

稲本潤一のモチベーション ————— 39

日本を代表する23人 ————— 44

フィリップ・トルシエの心 ————— 47

高原直泰のストライカー魂 ————— 51

第2章

ジーコ時代に得たもの、失ったもの

試合を変えた洞察力 ————— 59

南米はかけがえのない「友人」 ————— 62

「代表歴」をめぐる勝手な解釈 ————— 65

ワールドカップ
予選をめぐる
64の話

未完成のまま挑む予選 ————— 68

PKには力強いキックを ————— 71

遠ざかる「約束の地」 ————— 75

予選を戦い抜く本物の「強さ」 ————— 79

停電経験 ————— 83

功労者への敬意 ————— 86

中田英寿の自己表現 ————— 89

小野伸二の「ひとりの時間」 ————— 93

無観客試合 ————— 97

いまこそ「冷静と集中」を ————— 100

大雨の試合の戦い方 ————— 104

相手を恐れず、侮らず ————— 109

代表選手に必要な「魂」 ————— 112

若い力の台頭 ————— 116

代表23選手に見る「日常」の大切さ ————— 119

オシムの目指した「日本サッカー」

走り続けるサッカー ————— 127

イビチャ・オシムの手腕 ————— 130

日本サッカー発展へのメッセージ ————— 133

アラブ世界のたくましさ ————— 137

負け続けてはならない ————— 140

信頼に値する選手とは ————— 143

エゴか、チームプレーか ————— 147

日本型トータルフットボール ————— 149

10年目の秋 ————— 153

岡田武史「世界を驚かせるサッカー」への挑戦

同じ過ちを繰り返すな ————— 161

直感に頼る決断もある ————— 164

男女代表、1枚の写真 ————— 168

日本サッカーに必要な15の鉄則

テレビ放映の都合 ————— 170

日本のメッシたち ————— 172

国際親善試合の危機 ————— 176

旅人としてのサッカー選手 ————— 178

スローインは重要なリスタート ————— 180

非人道的なキックオフ時間 ————— 182

4年にいちどのめぐり合わせ ————— 185

「ラマダン」の予選 ————— 187

「勝って当然」ではないアジア予選 ————— 189

ミスを犯す「権利」 ————— 191

心理戦 ————— 193

「カマモト」不在のサッカー ————— 195

岡田監督は本気なのか ————— 198

「鉄則1」コーナーキックを早くける

「鉄則2」	左利きを起用せよ	206
「鉄則3」	アイコンタクトを忘れるな	209
「鉄則4」	スローインを磨け	212
「鉄則5」	ヘディングの極意	215
「鉄則6」	相手コーナーキックからの逆襲を	219
「鉄則7」	クイック・リスタートを増やせ	222
「鉄則8」	考え抜いたパワープレーを	226
「鉄則9」	サブもいっしょにウォームアップを	230
「鉄則10」	頭脳明晰なストライカーを	234
「鉄則11」	1対1はペナルティーアークへ	237
「鉄則12」	球際を強く、ボールを奪い返せ	241
「鉄則13」	ミッドフィルダーもヘディングを	243
「鉄則14」	スペースをつくり、瞬時に使え	246
「鉄則15」	試合の筋書きを読め	248
ワールドカップ時事年表		251

相手を恐れず、侮らず

05/12/07

「どんな試合だって、0―0から始まるんだ！」

試合前の更衣室で、オランダ・サッカー史上最高のプレーヤー、ヨハ
ン・クライフは突然大声を上げた。^{*21}

1971年5月、クライフを中心とするアヤックスはヨーロッパ・チャンピオンズカップ（現在のUEFAチャンピオンズリーグ）の決勝戦に臨んだ。決勝進出は2年ぶり2回目。前回は経験豊富なACミラン（イタリア）にしてやられたが、この日の相手はギリシャのパナシナイコス。まったくの「無印チーム」だった。

「今回は楽勝」というムードが漂うチームメートたちに、クライフは強く警告した。それが冒頭の言葉だった。

メディアは「勝って当然」と書き立ててきたかもしれない。相手は無名選手の集団で、クラブとしてもこのような舞台に立った経験はない。しかし試合が始まる前から勝った気持ちになるのは間違っている。どんなことだって起こりうるのがサッカーというゲームだ。勝つためには、もてる限りの力を出し尽くさなければならない。

^{*21}「ヨハン・クライフ」

オランダが生んだ史上最高の選手。1947年4月25日、オランダのアムステルダム生まれ。アヤックス・アムステルダムをヨーロッパ・チャンピオンズカップ3連覇に導き、その後スペインのバルセロナでも活躍した。71年、73年、74年と、3回にわたってヨーロッパの年間最優秀選手賞を受賞している。ワールドカップ出場は74年西ドイツ大会の1回だけで、準優勝に終わったが、オランダ代表の中心となつて「トータル・フットボール」で世界を驚かせ、その後30年以上にわたって世界のサッカーの目標となった。現役引退後は、アヤックス、バルセロナで監督を務め、バルセロナではチャンピオンズカップ優勝を成し遂げている。

クライフの言葉にわれに返った選手たちは、慎重に、そして情け容赦なくこの試合を戦い、2-0で勝って初めて欧州王者の座についた。

「私はすべての相手をリスペクトしている」

こちらはジーコ日本代表監督の言葉だ。2002年に就任してその10月にジャマイカと対戦して以来、日本代表はジーコ監督の下で60試合を戦ってきた。その間、試合に臨むジーコの態度は終始一貫していた。

「相手を恐れず、侮らず、勝つために全力を尽くす」

現代の世界のナショナル・チームの大半には、決定的な力の差があるわけではない。戦い方やほんの小さな運不運で、結果はどちらにも転ぶ。だからFIFAランキングでどんなに下の相手でも甘く見てはいけない。逆に相手がランキング・トップのブラジルでも、恐れる必要などない。

*22

ことし6月、ドイツでのFIFAコンフェデレーションズカップB組の最終日、準決勝をかけたブラジルとの対戦を前に、誰よりも闘志をみなぎらせていたのがジーコだった。たしかにスターぞろいで強いチームにはちがいない。しかし日本が負けると決めつけるのは間違っている——。その言葉に触発された日本代表は見事な戦いを見せ、失点するた

びに取り返して2-2の引き分けに持ち込んだ。

*22

「FIFAコンフェデレーションズカップ」

国際サッカー連盟（FIFA）の代表チームによる公式大会のひとつ。FIFA傘下の6つの地域連盟（コンフェデレーション）のチャンピオンを集め、現在は4年にいちど開催されている。1992年にサウジアラビアで開催された国王の名前を冠した招待大会がきっかけとなり、95年から05年まで2年ごとに開催され、01年韓国／日本大会と05年ドイツ大会は翌年のワールドカップのプレ大会として実施された。しかし過密日程にヨーロッパを中心としたクラブ側から批判が多く、05年以後は、4年にいちど、ワールドカップの前年にワールドカップ開催国でプレ大会として開催することになった。09年大会は南アフリカで開催される。日本は、95年、01年、03年、05年と過去4回の大会に出場、01年には準優勝を飾っている。

ワールドカップ2006ドイツ大会の組分け抽選会が目前に迫ってきた。12月9日（日本時間10日早朝）、日本が1次リーグで対戦する3チームが決まる。

ワールドカップに出場するすべてのチームの当面の目標は、4チームが総当たりする1次リーグを突破し、ベスト16による決勝トーナメントに進出することにある。

前大会では、ディフェンディング・チャンピオンのフランスと、有力な優勝候補だったアルゼンチンがこの「第1ハードル」を突破できずに涙をのんだ。最後には圧倒的な強さを見せたブラジルでさえ、1次リーグの時点ではチームがまとまっておらず、危うくトルコに足をすくわれるところだった。いまや、ワールドカップではどんなチームにとっても「絶対」はない。

それは、どんなビッグネームと対戦することになっても日本にも十分チャンスがあるということであり、逆に、初出場でFIFAランキングがどれだけ低いチームでも、日本が力を出し切らない限り勝利を手にすることはできないということを意味している。

抽選結果が出たら、冷静にライバルたちの戦力を分析し、後はジーコと日本代表チームを信じて力いっぱい声援を送りたいと思う。

*23 ワールドカップ組分け抽選2005

日本はF組にはいり、オーストラリア、クロアチア、そしてブラジルと対戦することになった。

恐れることも悔ることも不要だ。すべての試合は0―0から始まるのだから。

岡田監督は本気なのか

09/04/01

「志（こころざし）」について考えている。

サッカーの場でこの言葉を聞いたのは、1998年から2002年まで日本代表監督を務めたフィリップ・トルシエの口からだった。

ホスト国として予選なしで出場できる2002年ワールドカップ。前大会で初出場を果たしたばかり、それも3戦全敗だった日本を、少なくとも1次リーグ突破に導かなければならない。その心構えとして選手たちに求めたのが「志」だった。

「目の前の相手に勝つために全力を注ぎつつ、高い目標を忘れずに自らを奮い立たせ、駆り立てていく——」

「志があるなら、こんな勝利で満足するな」と、彼はたびたび選手たちに語った。

3月28日、岡田武史監督率いる日本代表は1―0でバーレーンを下し、ワールドカップ予選突破も見えてきたが、日本代表のプレーから「志」は感じられただろうか。岡田監督は「目標はワールドカップでベスト4」と語っているが、それは本気なのだろうか。

2006年ドイツ大会、日本は世界で最も早く予選突破を果たしたが、ドイツの舞台では1分け2敗と、これも早ばやと敗退が決まってファンを落胆させた。明白になったのは、ワールドカップ出場自体はもう「志」足りないということだった。その先に行かなければ、少なくとも、そこで誇るに足る内容の試合ができなければ、また落胆だけになる。

ことしの3月に日本中を夢中にさせたのはサッカーの日本代表ではなく、野球のワールドベースボールクラシック(WBC)に出場した「侍ジャパン」だった。前回のチャンピオンなのに、彼らはけっして「タイトルを守る」とは言わなかった。「もういちど優勝して、今度こそ日本の野球の力を世界に認めさせたい」と、異口同音に語った。このチームには「志」があった。それに一丸で取り組んだから、大きな感銘を生んだのだ。

イビチャ・オシム前日本代表監督は、よく「野心をもたなければならぬ」と話した。野心は「志」と同じ。トルシエもオシムも「アンビシヨン」という言葉を使うのだが、トルシエの通訳に当たった臼井久代さんが、トルシエの話しぶりから、あえて「志」という古めかしい日本語を選んであてたのだ。

ワールドカップ予選は何よりも結果を求められる試合かもしれない。

しかしだからこそ、そこにぶれない「志」があれば、大きな成長の糧になる。予選も残り3試合。そこで日本代表の「志」の高さを感じ取りたいと思う。